

# スポーツ文化フォーラム Session 11

相田みつを美術館 館長 相田 一人 氏

スポーツとは、  
そのときどう動く、の連続である。

by 相田

一人



# スポーツは文化である

スポーツドクターとして、  
「スポーツは文化である」と  
世の中に伝えたいと思っています。

文化にはスポーツもあり芸術もあり、音楽もある。  
人間の心の豊かさを作る活動すべてが文化なのです。  
スポーツの文化的価値は、  
医療性、芸術性、コミュニケーション性、教育性、  
この4つであることに行き着きます。  
人はこの4つがないと、人間らしく生きていけません。

スポーツの医療性によって元気を、  
芸術性によって感動を、  
コミュニケーション性によって仲間を、  
教育性によって成長を。

「スポーツは文化」と言える国にすることが、  
私の志でありミッションの1つでもあります。

父・相田みつを

辻 今日は“心”とは、“生きる”とは  
について、スポーツドクターの私が相田  
みつを美術館の館長であり、みつを氏の  
ご長男でもある相田一人さんと語りあつ  
ていきたいと思つています。

まずは、息子さんからみた相田みつをさ  
んについてお話をいただけますでしょ  
うか。

**相田** 父は書家であり詩人でした。詩人であり書家。順番はどちらでもいいのでですが、要するに自分で詩をつくって自分の筆で書にする自作自演。音楽の世界に例えて言いますとシンガーソングライターに近かつたと息子の私は考えていました。

**辻** 家庭内での教育的な観点ではどのようなお父様だったのですか？

相田  
「うつくしいものを美しいと思え

相田 『うつくしいものを美しいと思えるあなたのこころがうつくしい』という書があります。それは父が子育ての原点に置いていた言葉でした。「絵でも風景でも、美しいものに触れたときに『ああいいなあ』と心の底から感動する心、それが「うつくしいものを美しいと思える」心であり、そのことを反対から言うと、悪いものやいけないこと、間違ったことを見たり聞いたりしたときにこれはおかしいじやないかと瞬時にパッと分かる心のことだ。子どもが小さいときに、親が子供のためにしておかなければならぬことはいっぱいあるだろう。その中でも一番自分が大事だと思うことは、美しいものをみて、素直に感動できる心を、美しいものを美しいと思える心を養つてあげることなんじやないか。」父はこういうことをいつも言つていました。

では、どうしたら子どもの中に美しいものに感動する心が芽生えるのか。父の答

えは明快でした。まず親が感動することだと言うんです。親が美しいものに感動すると必ず子どもの心にそれが伝わっていくんだと。私の思い出の中で父がそれを実践したと思うことがあるんです。私のふるさと栃木県足利市には渡良瀬川という川がありまして、私たちの家はそのすぐ傍にあつたのですが、父は疲れると私と妹の手を引いて魚釣りに行つたんです。帰りは妹と私の手をひいて河原の土手を歩いて父の好きな童謡を歌いながら歩きました。その時の夕焼け空がとてもきれいで、それを見ながら子どもの私たちに『何できれいな夕焼けなんだろう』と言うんですね。片手は繋いでいますから自分の父親が口先だけでそう言っているのかと、腹の底からそう言っているのかと、いうのはやはり伝わってくるんです。父はそうやって私や妹に美しいものを美し

## 独特な文字に込められた思い

相田 父にまつわる誤解で一番大きいのがこの独特的な文字です。見る人に強烈な印象を与えます。そのため、人は相田みつをは書をちゃんと勉強したことがないんじやないか、我流で書いているのではないかと誤解しています。数日前、七十歳くらいの男性が数名で美術館にいらつしやいました。**「やれなかつた、やらなかつた、どつちかな」**という書をご覧になつていました。その男性たちは「いい言葉だな」「孫にこの言葉を買ってあげよう」なんて話されていて、嬉しくなつてそばに行つたんです。そうしたら、一人の男性が「言葉はいいけどなあ、字が下手だよな」、もう一人の方は「これなら俺の方が上手に書けるよ」なんておっしゃつていました。

確かにそう思わせてしまうのが父の字の特徴ですが、実はこの文字はそんなに簡単

單に書けるものではないんです。

父は旧制中学時代に書に興味を覚え、十七歳のときに当時ふるさと栃木県でナンバーワンと言われた書家の方に入門して、結構早くから勉強を始めているんです。二十三歳の父が書いた書がここに残っています。昭和二十二年に戦後はじめ開かれた書の全国コンクールで父のこの作品が第一位となりまして、それでこの作品が残っているんです。二十代は様々なコンクールに入選・特選を重ねておりまして誰がどうみてもバリバリの正統派でした。では、その父がどうしてこの独特な字を書くようになつたのか。転機は三十歳くらいのときです。父はよく言つていました。「自分はプロの書家だから書けと言われたらいかようにでも書けれる。それで、見てくれた人は『へえこいつはうまいね。』と関心はしてくれるかもしないか」と。つまり、技術だけが達者にな

つて人を感心させることが出来ても感動させる書は書けない。それで父は悩んだそうです。大事なことは、父がこの独特な文字からスタートしたわけではなく、(正統派の)こうした文字が書けるから、はじめて今のような文字が書けるから、はじめにんげんだもの」という代表作があります。これがもし活字だつたらどうか。実際の作品と活字にしたものを見比べてみると活字の方からは何かが抜け落ちてしまつています。何が抜け落ちているか。この言葉に込めた父・相田みつをの思いが抜け落ちてしまつたんです。父はこの独特な文字じやないと自分の思いを伝えられなかつたんです。この文字は非常に強烈で、父の思いと文字がピタリと一致しているわけです。

## 感じて動く

辻 感動というのは一つのキーワードで

しようか。

**相田** そうですね。〈感動とは感じて動くと書くんだな〉という詩がありますが、父は『感動』ということをとても大事にしていました。毎日すさまじい量を書いて失敗の山が出来ていたわけですが、その中から生まれた言葉が『一生勉強一生青春』という作品ではないかと思います。父はこう言つていました。「人間、若いうちは心も体も柔らかいんだ。自分も若い時は心身ともに柔らかかったと思う。しかし、ある年齢になつてくると、どんなにがんばつても体は硬くなってしまう。自分もそういう年になつたけども、心だけは、精神だけは常に若々しく、一生青春であります。そのためには絶えず勉強、一生勉強というものがないと一生青春、心の若さは保てない。だから一生青春と一生勉強は二つで一つ。どちらが欠けても成り立たない。」これは最近気付いたんです

が、その二つで一つということを父は視覚的にもこの書で表しているんです。青春の春の線がバランスを崩しそうなくらい、やけに長い。でもその(線の)上に一生勉強が乗っています。視覚的にも自分の思いを伝えるためにこういうレイアウトを取りつたのではないでしようか。

## 相田みつをから生まれた 言葉の魅力

**相田** 父の言葉というのはよく見ると非常に複眼的に書かれています、一方通行で書かれたものはありません。例えば『つまづいたつていいじゃないか』にんげんだもの』という詩も受け止め方によつてお客様の反応が全く違うんです。病気をされたり、仕事など何か失敗をしたときに背中をポンと押してもらつたような気がしますという方が約七割。ところが残り三割は「怖い言葉ですね」とおっしゃいます。急けたり、さぼつたりしていると

きにこの言葉を見ると背中がピンと伸びるような緊張感を覚えるとおっしゃるんです。父はよくこういうことを言いました。「人間だれだつてつまづきたくない。でも一生つまづかない人なんていないんだ。ただ、自分は一つだけ一生つまづかない方法を知っている。それは何かと言うと何もやらなければ絶対につまづかない。」つまづくということは何かに一生懸命になつてチャレンジするから結果的に失敗してつまづくわけで、何もやらなければつまづかないですよね。父の言葉というものは単純そうでいて、色々な見方が出来るというのが魅力なのかもしれないですね。

**辻** ゼロから詩を創造されて、みつをさんしか書けないカタチで感動と共に我々のところに届けられるのですが、ゼロから作品となるまではどのような流れなのでしょうか?

**相田** それは意外と複雑でして、父は自

分の思いをまず詩にまとめるんですが結構長いんです。一度完成させた詩をそのまま書にすることはあまりしません。筆をとつて書く時には、例えて言うとレモンをぎゅっと絞るように、詩をさらに絞つて、本当に一言にしたものになつているんです。ですから「つまづいたつていじやないかにんげんだもの」という言葉の裏には長い詩が残されています。

### プロフェッショナルとは

**辻** 「プロの書家だから」というお話がありましたが、「プロフェッショナル」ということをみつをさんはどうのように捉えられていたんでしょう？

### 師との出会い

**相田** 父の作品に「その時の出逢いが人生を根底から変えることがある。よき出逢いを」という言葉があります。父の人生では十七歳で参加した短歌の会で、武井哲応老師という曹洞宗の禪僧との非常

父は一晩で三万円分の紙を使うことがあります。父が書く紙はすべて本番用なんです。練習用の紙は使いません。父はこんなことを言つていました。「プロとアマチュアには絶対差があつてしかるべきだ。アマチュアというのは楽しみでやつていて、それはそれでいい。でもプロと言うのは命がけで生活の全てをそれには捧げるんだ。」と。だから貧乏をしていても紙、硯、筆は最高のものを買つていたんです。当然お金がないので、ある時払い、信用払いみたいな感じでしたね。クレジットも何もない時代ですから。その分、母が苦労をしたわけですが。

### そのときどう動く

**辻** 最後になりますが、本対談のテーマである「スポーツとは」という問い合わせて「スポーツとは、そのときどう動く、の連続である」という言葉をいただきました。これについてはいかがですか？

に大きな出会いがありました。この方との出会いがあつて、生涯この方に師事して、武井老師のお寺で四十年に渡つて坐禅を組ませてもらつっていました。道元禅師の代表作である正法眼藏しょうばうげんざうはボロボロになるまで文字通り一行一行読んでいました。ですから父が書くもののベースには禅というものがあるんです。「武井哲応老師という素晴らしい本格派の師匠に出会つて四十年も勉強させてもらつた。四十年間学んだことをひと言で言つてみよと言われたら何と答えるか」と自分に聞いてつづった詩がこれです。「そのときどう動く」

**相田** スポーツに限らず、人生はそのと

きどう動く、の連続ですね。いくらシミュレーションをしても実際にやってみないとわからない。「**体験してはじめて身につくんだな**」という作品もあるくらいです。書も実際に書いてみると分からぬ。その代わり書けば答えは一発で出るんです。

**辻** スポーツ文化フォーラムでは毎回ゲ

ストの方から「スポーツとは」という問い合わせをお答えいただいていまして今回が十回目になりますが、どのゲストの言葉も「スポーツ」を「人生」に置き換えても通じるように思います。スポーツには人生を豊かにする文化性があるのだと改めて感じます。一人さん、今日は本当にありがとうございました。

二〇一八年八月二十一日  
スポーツ文化フォーラム



## 相田 一人

相田みつを美術館 館長

相田みつを美術館館長。昭和30年栃木県足利市生まれ。

書家・詩人である相田みつをの長男。

出版社勤務を経て、平成8年、東京銀座に相田みつを美術館を開館。

「じぶんの花を」「本気」「ある日自分へ」(文化出版局)、

「いまからここから」(ダイヤモンド社)などの編集、監修に携わる。

著書に「父 相田みつを」(角川文庫)「書 相田みつを」「相田みつを 肩書きのない人生」(文化出版局)がある。現在、美術館業務の傍ら、全国各地で講演活動や執筆活動を行っている。  
(2018年8月現在)

2018年8月21日  
スポーツ文化フォーラム  
Session11  
相田みつを美術館  
編集 株式会社エミネクロス  
撮影 笠井祐里子  
製作・発行  
株式会社エミネクロス

## スポーツ文化フォーラムとは

スポーツや文化、人生などについて  
より豊かな毎日を送るヒントや気づきを  
多方面でご活躍される文化人をゲストにお迎えし  
スポーツドクターと対談するイベントです。

<http://www.doctor-tsugi.com/>

